

ジョイスの「死者たち」について語る死者たち — ピーター・マーフィーの “The Dead” における戦いと語り —

松井 かや[※]

The Dead Talk about Joyce's “The Dead”:
War and Narrative in Peter Murphy's “The Dead”

Kaya MATSUI

This essay will focus on Peter Murphy's “The Dead” (2014), a ‘cover’ of Joyce's “The Dead” (1914). After showing that both works have themes of battle and narrative, the paper will reveal Murphy's process of desacralizing Joyce's well-known masterpiece “The Dead.” In Murphy's story, in the fictional town of Bargytown-On-Sea on the fictional island of Hyberny, a group of off-island militia burn down the library and a group of vagrants rescue one book – Joyce's “The Dead” – from the library. Knowing nothing about Joyce, they gather around the bonfire, and listen as one reads the story aloud and then all discuss it. The destruction of the library could be considered a metaphor for the suppression of Irish culture by the British, but the one remaining book suggests hope. Indeed, by being viewed from the perspective of vagrants, marginalized by society, (in fact, they are literally the dead who burned to death in the library fire) and especially from the perspective of one female vagrant, Joyce's “The Dead” opens to new avenues of criticism and interpretation. Emphasizing the strength of the Irish oral literary tradition, Murphy's “The Dead” skillfully demonstrates that from one story other fresh narratives can emerge.

Keywords: James Joyce's “The Dead,” Peter Murphy, narrative

1. 『ダブリナーズ 100』と新しい「死者たち」

ジェイムズ・ジョイスの『ダブリナーズ』(*Dubliners*, 1914) 出版から 100 年後の 2014 年、『ダブリナーズ 100』(*Dubliners 100*) が刊行された。副題に「原作に触発された 15 の新しい物語」(Fifteen New Stories Inspired by the Original) とある通り、現代アイルラン

キーワード：ジェイムズ・ジョイス「死者たち」、ピーター・マーフィー、語り

※ 本学文学部英語英文学科

ド作家ら 15 人が 15 の短編を「カバー」した「100 年後の『ダブリナーズ』」である。

「リライト」(rewrite)ではなく「カバー」(cover)、すなわち、ある曲をオリジナルの歌手とは別の人物が歌うという意味の音楽用語を用いることについて、編者のトマス・モリスは序文でその経緯と意図を説明している。きっかけは、この本を企画中に彼がダブリンのグラフトン・ストリートで耳にした路上演奏であった。

And I was thinking about this when I heard a Grafton Street busker butcher Jeff Buckley's 'Hallelujah'—itself a transcendental cover of the Leonard Cohen song—a cover that seems to speak to and speak past the original.

Thinking of Jeff Buckley's song—the heights its reaches, the depths it plummets—the seemingly nebulous idea of 'covering' a story came to me. It can work in music, I thought. And Joyce's prose is, we're always told, so musical . . . (Morris viii) (下線は筆者による)

モリスが聴いたのは一人のバスカー (busker) による「ジェフ・バックリイによるレナード・コーエンの『ハレルヤ』のカバーの更なるカバー」だったわけだが、彼はバックリイのカバーを「原曲に語りかけ、そして原曲を超えて語るよう」だと評する。上の引用に続く部分には、『ダブリナーズ 100』の企画に参加しようとする作家と彼との架空の会話があり、彼は「カバーする」とはどういうことかと聞く作家に「ストーリーをもう一度語ること、但し自分自身の声で」(ix)と説明する。この序文自体が身近な誰かに体験談を語るような調子で書かれていることから、彼がこの本を作るに当たって「声」や「語り」を重視したことは明らかであるが、さらに言えば、彼はジョイスの作品への単なるオマージュではなく、ジョイスの作品を「超えて」それぞれの作家たちの声と語りが響くような、音楽的な作品集を意図したわけである。

モリスの呼びかけに応じた 15 人の作家たちは、それぞれに『ダブリナーズ』の短篇をアレンジしたり、現代版にアップデートしたりして、新たな作品を生み出した。例を挙げると、ジョン・ボイン (John Boyne, 1971-) の「アラビー」(“Araby”)では少年が恋をするのは年上の少年で、約束して向かう先は慈善バザーではなく、彼が出場するラグビーの試合である。ドナル・ライアン (Donal Ryan, 1976-) の「イヴリン」(“Eveline”)では、若い男性イヴリンが、介護が必要な母親と、アイルランドに移住してきた難民の女性ホープとの間で自分の人生を決めかねる。ポール・マリー (Paul Murray, 1975-) の「痛ましい事件」(“A Painful Case”)では、辛口のレストラン批評家であるジェイムズ・ダフィーが、修道院が経営する隠れ家的レストランに惚れ込み、そこで給仕をする一人の物言わぬ修道士と交流を重ねる。これらはいずれも元の作品のプロットをある程度しっかりと継承しているが、印象的なのは、やはりそれら新しい作品から聞こえてくる人物たちの「声」である。例えば、イヴリンが彼女のために用意した家に足を踏み入れた際の、難民の女性ホープの明らかに不満げな「これでいいわ」(It will do) (44) という発言は、イヴリンら難民を迎える側がほとんど無意識に期待する感謝の言葉とは全く異なるものであり、彼女が援助する側の期待通りの言動をするわけではない、自分の人生を生きる一人の人間であることを読者に強く意識させる。また、物言わぬ修道士がついに口を開いたときの「鼻にか

かったイングランド中部の訛り」(148)は、ダフィー氏と読者の前に、俗世から切り離された神秘的な修行僧ではなく、他者との繋がりを渴望する一人の平凡な人間を現出させる。これらの「声」は、移民の受け入れや性的指向のカミングアウトといった現代的な問題を浮かび上がらせるものであり、作品が「原作を超えて語る」ことに大きく寄与していると言えよう。

そして、『ダブリナーズ 100』において元の作品からおそらく最も遠く離れ、また最も特徴的な「声」を響かせているのが、ピーター・マーフィー (Peter Murphy, 1968-) による「死者たち」(“The Dead”) ¹⁾ である。ジョイスの「死者たち」は『ダブリナーズ』内のみならず、英語で書かれた短篇の中でも珠玉的一篇として名高い (Moore 123) ものであるが、これを「カバー」するにあたり、マーフィーは元のプロットを一切引き継がなかった。彼は2014年のダブリン・ブック・フェスティバルでのインタビューで、自身の“The Dead”を着想した瞬間を以下のように振り返っている。

I chewed on the idea of “The Dead” for a while. Then I took the dog for a walk around the wasteland at Wexford harbour, and I imagined a bunch of hobos sitting around in a sort of war-torn wasteland where the only story left intact was “The Dead,” and I imagined the kind of arguments these jackdaw folk might have had around the tar-barrel at night. (Moore 123-24) ²⁾

戦争で荒廃した土地、浮浪者の群れ、そこに残った唯一の物語としてのジョイスの「死者たち」、樽の火を囲んでの議論——これらを出発点に、マーフィーはジョイスの「死者たち」から全く新しい“The Dead”を作り出した。さらに、彼はこの物語の主人公である一人称の語り手に独特の声を与える。マーフィー自身が「雑種の言葉」(a mongrel language) と呼ぶそれには、「時代錯誤的な古めかしい省略」やダブリン方言特有の単語や言い回し、発音される音をそのまま表記したような造語が見られる (Moore 124)。一見して標準的な英語ではないとわかるこの言葉について、アイルランドの作家 Éilís Ní Dhuibhne は、マーフィーがおそらく「トラベラーの言葉 (travellers’ cant) を表現しようとしたのではないかと指摘する (152)。アイリッシュ・トラベラーとは非定住民であり、独自の生活様式や文化・慣習を持つマイノリティー・グループである。その出自や伝統に強い誇りを持つ彼らは、しかしながら、昔も現在も根強い偏見と差別に晒される人々でもある ³⁾。

マーフィーの“The Dead”の主人公は、逃亡先の島 Hyberny で住人たちに受け入れられず、「この敵意に満ちた土地」から元いた場所である「地獄の島」(the Isle of Hell) に帰るべきだろうかと考える (209)。彼をごく自然に受け入れたのは、やはり他の人々から排除され、居場所を持たない浮浪者たちであった。彼らはジョイスの「死者たち」に登場する、裕福なモーカン家のクリスマスのパーティーに温かく迎え入れられる中流階級の人々とはあまりにも隔たっている。そのような彼らの中にジョイスの「死者たち」が置かれることの意味を、本論では探ってみたい。そのために、この一見全く似ていない2つの「死者たち」を繋ぐテーマに着目する。それは「戦い」と「語り」である。

2. ジョイスの「死者たち」：「語り」が呼び起こす戦いと、「語り」の力

ジョイスの「死者たち」の舞台は1904年のダブリンである。この物語は、主人公のゲイブリエル・コンロイが妻のグレタとともに訪れた、叔母のモーカン姉妹とその姪のメアリー・ジェインが催す毎年恒例のクリスマスのパーティーにおける出来事を中心に展開する。モーカン家のパーティーは一見すると和気藹々とした「歓待」の場と見えるが、そこは敵意や衝突を内包する場でもある。例えば、パーティーのクライマックスで、ゲイブリエルは主催者の3人の女性たちを三美神に喩えつつ、「アイルランドの誠実で温かく、礼儀正しい歓待の精神の伝統」(Joyce 176)について語り、喝采を受ける。しかし、この前に、彼はダンスの相手となったナショナリストのミス・アイヴァーズから、イギリス寄りの新聞に書評を書いたことを咎められている。祖国を知るためにアイルランド西部に行くべきだと彼女に強く促された彼は、「僕は自分の国にはうんざりなんだ、うんざりなんだよ！」(164)と声を荒げる。去り際の彼女に「西方のブリトン人！」と軽蔑の言葉を囁かれた彼は、食後のスピーチで「新しい理念と新しい主義によって駆り立てられる世代」がアイルランドの「古い時代からあった人間性、歓待、やさしいユーモア」を失っていると語るが(176)、これはナショナリスト批判であり、ミス・アイヴァーズへの嫌味である。このような彼の語りや、彼とミス・アイヴァーズのやりとりの中に、イギリスとの関係を軸とした過去と現在のアイルランドの歴史や、母国に対する彼の複雑な思いを読み取ることができるだろう。

実際、この物語の背後には、アイルランド史において極めて重要ないくつかの戦いのイメージが密かに織り込まれている。アン・フォガティは「死者たち」のテキストにおける「様々な記憶と歴史の想起」(Fogarty 47)に着目し、「個人の記憶」の語りが社会的な記憶、すなわち歴史的な出来事を手繰り寄せることを示す。例えば、パーティーの帰り際にゲイブリエルが語るモーカン家に伝わる逸話であるが、これは、昔ゲイブリエルの祖父のパトリック・モーカンが馬のジョニーに乗って公園での閱兵式を観に向かった際、ジョニーがトリニティ大学前の「馬に乗ったビリー王の像」を見るなりその周囲を回り始めてしまい、祖父が大いに憤慨したというものである(180)。ビリー王とは17世紀の英国王ウィリアム3世の愛称であり、彼は1690年に軍を率いてアイルランドに乗り込み、カトリックであるジェームズ2世の軍とボイン川で対峙し、たった一日で勝利を収めた。この逸話に関して、フォガティは、白馬に乗ったウィリアム3世の姿が、この戦いでの「プロテスタントの勝利の象徴」となったこと、また、馬に乗ったビリー王の像の周囲をただ回っているパトリックの様子が、「ボイン川の戦いでの屈辱の再演」に見えることを指摘する(Fogarty 54)。ゲイブリエルの語りは祖父に関する個人的な記憶であるが、「馬に乗るビリー王」により、17世紀のボイン川の戦いとカトリックの敗北、その後も長く続くプロテスタント支配への隷従という社会的な記憶が呼び起こされるのである。

同様のことは、グレタの語りにも見られる。パーティーが終わり、客たちが帰り始める中、招待客の一人のテノール歌手が歌った有名なバラッド「オークリムの乙女」(“The Lass of Aughrim”)を聞いたグレタは、ホテルの部屋でゲイブリエルに、故郷のゴールウェイの友人でいつもその歌を歌っていたマイケル・フューリーとの思い出と、若すぎた彼の死について語ることになる。彼女がこの逸話を語る契機となったバラッドの舞台とさ

れるオークリムは、ゴールウェイ州の小さな村であり、ボイン川の戦いの翌年にこの地でカトリック勢力とウィリアム3世軍が会戦した。このオークリムの戦いは「アイルランドの地で起きた戦いのうち、最も多くの血が流されたものの一つ」(Fogarty 56)であり、「アイルランドにおけるウィリアム3世軍側の軍事的優勢を決定」づけるものとなった(山本61)。つまり、そこはアイルランドでのプロテスタント支配の確立の要となった土地なのだ。

さらに、フォガティは、ゲイブリエルが若くして死んだマイケルの死の理由を「肺結核だったのか」と尋ねた際の、グレタの「彼は私のために死んだのだと思う」(“I think he died for me”) (191) という答えに注目する。肺病を患っていたマイケルは、グレタがダブリンの修道院に行く前日に彼女に会うために雨の中をやってきた。雨に濡れると死んでしまうと心配するグレタに、マイケルは「生きていたくない」(192) と言い、その一週間後に亡くなる。従って、「私のために死んだのだと思う」というグレタの推測はおそらくその通りなのだが、この発言に、フォガティは、イエイツとグレゴリー夫人による劇『キャスリーン・ニ・フーリハン』(*Cathleen Ni Houlihan*, 1902) で老婆が言う「彼は私への愛のために死んだ」(“He died for love of me”) (Yeats 89) という台詞の反響を聞き取るのである(Fogarty 58)。1798年のアイルランド西部メイヨー州のキララという村を舞台とするこの劇で、貧しい老婆から「美しい土地を取り戻したい、よそ者に家から出て行ってもらいたい」(90) と告げられたマイケルは、翌日に結婚を控えていたにもかかわらず、家族の制止を振り切り、蜂起に加わるために老婆の後を追って家を出る。そのとき、老婆は若い女王に姿を変える。この老婆は「植民地支配で疲弊したアイルランドの化身」(結城 30) であり、この劇の背景にあるのは英国支配からの脱却を目指して起こった「ユナイテッド・アイリッシュメンの反乱」の一つ、キララの戦い(the Battle of Kilala) である。この劇のマイケル・ギレインは祖国への愛のために命を捧げようとするナショナリストであり、その姿は「死者たち」においてグレタへの愛のために命を落とすマイケル・フューリーに重なる。こうして、グレタの語りは愛国的な劇と結びつき、18世紀の戦いとカトリックの敗北の記憶を喚起するのである。

このように、ゲイブリエルとグレタの語りはアイルランドの苦い過去の歴史を浮かび上がらせる。そのような社会的な記憶を手繰り寄せるのが個人の「昔語り」であることに、改めて着目しておきたい。二人の語りは、聞き手に正確な事実を提示するという性格のものではない。ゲイブリエルの話しぶりは聞く人たちを大いに楽しませ、彼が馬のジョニーに憤慨する祖父の声音を再現したときには大爆笑が起こる(180)。言ってみれば、彼の語りによって亡き祖父がその場に呼び出され、その場で生者に温かく迎え入れられるのだ。それはまさに「歓待」と呼べる状況であろう。

そして、グレタの語りからは、「語り」という行為の持つ力がさらに強く感じられる。彼女の語りには空白や推測や伝聞が含まれ、事実を知ろうとするゲイブリエルの問いとそれに対する彼女の答えはしばしば噛み合わない。先に引用したマイケルの死の理由をめぐるやり取りにおいても、「肺結核か」と尋ねるゲイブリエルに、グレタは「私のために死んだのだと思う」と答える。その答えに彼は漠然とした恐怖を感じる。

A vague terror seized Gabriel at this answer as if . . . some impalpable and vindictive being was coming against him, gathering forces against him in its vague

world. . . . Her hand was warm and moist: it did not respond to his touch but he continued to caress it . . . (191)

ゲイブリエルは「実体のない、執念深い存在」が「反対勢力を結集して」自分に近づいてくるのを感じるが、この亡霊の如き存在は、間違いなくグレタの語りによって呼び起こされている。彼はグレタの手に触れているが、彼女はその接触に反応しない。それは、グレタがゲイブリエルと「共にいながら、共にいない」ことを示唆するだろう。彼女はこのとき、自身の言葉が呼び出した死者マイケルと共にいる。肺結核で死んだ人間は生き返らなくとも、「私のために死んだ」人は蘇る。死者との関係を持ち続ける生者の「語り」が、死者を召喚するのである。

「死者たち」において、個人の記憶から生まれる「語り」は社会的な記憶、すなわちアイルランドの戦いと敗北の歴史を浮かび上がらせ、そして、死者を蘇らせる。このような「語り」は古来のアイルランドの口承文学の伝統の精神と無縁ではないだろう。アイルランドの歴史から消すことのできない戦いの記憶と共に、ここで提示される「語りの力」もまた非常にアイルランド的なものと言えそうである。

3. マーフィーの“The Dead”：浮浪者たちの戦い

ジョイスの「死者たち」の結末で、ゲイブリエルの魂は「大勢の死者たちが住むあの領域へと近づいて」いき、読者は「西への旅に出発する 때가来た」⁴⁾ という彼の内的独白を聞く(194)。マーフィーによるカバー作品“The Dead”は、ジョイスの「死者たち」の「その後の物語」であるのかもしれない。“The Dead”は主人公の船出から始まる。そして、彼が向かう先は、まさに死者たちが——正確には死者たち「も」——住む島である。

この物語は、「地獄の島」から Hyberny という島に逃亡した主人公兼語り手が、目の前にいる誰かに Hyberny での体験を初めて語るという体で書かれている。その語りの言葉は、すでに言及したように、アイルランドのトラベラーの言葉を思わせる生きた話し言葉であり、この作品を「読む」ことは行き場のない主人公の「声を聴く」ことに限りなく近い。さらに、この主人公の語りは別の人物(たち)の語りを内包している。Hyberny の Bargytown-On-Sea という町で起きた図書館の焼き討ちについての浮浪者たちの語りと、その中の一人である Doc という人物によるジョイスの「死者たち」の朗読、そしてそれをめぐる彼らの議論である。「博学な元教員」(213)である Doc がこの町で起きた出来事を他所から来た主人公に語り伝え、仲間たちを前に物語を朗読する様子は、古代ケルトの吟唱詩人であるバルド(bard)や、アイルランドの語り部シャナヒー(seanchaí)を彷彿させる。

この口承文学の伝統の要素に加えて、“The Dead”が持つ顕著なアイルランドの特徴は、「アイルランド中世の物語ジャンルの一つ」である「異界行」(松岡 13)の形を踏襲しているということである。異界について、松岡は「異界は物理的にも、地理的にも、さらに意識的にも現世に近い。読むうちに、異界は現世と同じ場所の別の風景に過ぎないのではないかと思えてくる」とし、異界行物語を「現世の王権をめぐる抗争のパロディである」とする(松岡 13-14)。“The Dead”の主人公がたどり着く「異界」は Hyberny であるが、

作者のマーフィーはこれを「別の、あるいは近未来のアイランド」であると説明しており（Moore 124）、つまりそこは松岡の言う「現世と同じ場所の別の風景」と言えよう。しかも、ここは主人公の故郷である「地獄の島」からモーターボートでわずか30分の「身近な海上」にある。主人公が「地獄の島から来た反逆者」（210）と呼ばれることから、彼は戦いの場所から逃亡したと思われるのだが、たどり着いた先もまた、戦争で荒廃している。このように、“The Dead”は異界行物語の枠組みにびったりと収まっている。

但し、Hybernyで起きているらしい戦争は、「反逆者たちを匿った人間を罰するために」島外から「不遜な民兵の一団」（211）が送り込まれていることはわかるものの、端緒も不明で全体像はほとんどわからない。目立つのは島と人の荒廃ぶりであり、警察と政府はどうやらともに機能していない。その中で、唯一具体的に描写される／語られる戦争の一側面が、民兵の一団によるBargytown-On-Seaの図書館の焼き討ちである。この町では、収蔵場所の不足を理由にあらゆる記録を電子媒体で保存することになっていたが、町の電源がダウンしてからは、図書館が残された「たった一つの記録の保管場所」（212）であった。Docは主人公に、民兵たちがこの図書館を焼いた理由を次のように語る。

Why the library, says you. I'll tell ye why. Milisha men knows well a library is the root of all insurgency. Iffen ye burn a people's books ye burn their memory, and iffen ye burn their memory ye burn their history, and iffen ye burn their history they are no more ner drones. (211-12)

本を焼くことは人から記憶と歴史を奪うことであり、それらが奪われると人はただの「無気力な人」（drones）でしかなくなる。図書館が焼け落ちるときの「千もの骨が砕けるような」（212）音は、それがそのまま人の破壊であることを物語る。民兵らの目的は、人を「壊し」、無気力にして反逆させないことである。そのために、彼らは図書館という「記録資料の保存、累積によって世代間を通しての文化の継承、発展に寄与する社会的記憶装置」（『図書館情報学用語辞典』174）を徹底的に破壊する。記憶と歴史を抹消し、文化の継承を妨げ、人を無気力にする——これは、何よりもアイランド語という言葉と、様々な権利を土着のカトリックから奪ってきた、英国のアイランド支配の構図そのものである。ジョイスが『ダブリナーズ』で「麻痺」として描いたのも、長く英国の支配下にあつて主体性を失った人々の無気力状態であった。従って、この図書館の焼き討ちにアイランドの歴史が凝縮されていると言えよう。

そのことを踏まえた上で、本を救おうとした浮浪者たちの「戦い」に目を向けたい。彼らにとって、この図書館は生きるための「シェルター」（212）であった。この島は、屋内にいる「善良な人々」と、屋外の公園や森林にそれぞれに縄張りを持つ“junk-monkeys”や“grog-zombies”といった「チンピラたち」（chavvies）（212）に占拠されている。排除され、行き場のない浮浪者たちの冬の居場所が、図書館だったのである。燃え上がる図書館で本を救おうとした「反逆者」は、この浮浪者たちのみであり、彼らに救えた本はたった1冊であった。

No fire brigade to hose the flames, not a soul to save the books but for them merry

tramps. Into this charnel house they ventured as the fire raged and burned, but alas their efforts was for naught. . . .

Aye and all them books was cindered essep for one. One last remaining book, blackened beyond reading bar a hunnerd pages odd. This half-burnt book was likely the sole and only volume left in-tack in the town entire. . . (212)

燃えさかる炎の中、本は灰となり、図書館は「死体安置所」(charnel house)と化している。何も持たない彼らが飛び込んだところで、火を止められるわけもない。浮浪者たちの語りから場面を再現する主人公は、「彼らの努力は無駄だった」と言い切る。勝ち目のない戦いという点で、それはアイルランドでの英国支配に対する数々の蜂起に通ずる。ジョイスの「死者たち」で呼び起こされていたボイン川の戦い、オークリムの戦い、ユナイテッド・アイリッシュメンの反乱に加え、1916年のイースター蜂起⁵⁾も想起されるだろう。

しかし、明らかに失敗に終わったイースター蜂起が英国支配に対する一般民衆の心情を変え、結果的にアイルランドの独立へと繋がったように、図書館の焼き討ちでの浮浪者たちの戦いもまた、無駄ではない。彼らは1冊の本を救った。焼死して死者となった彼らは、彼らが死者とは知る由もない主人公と共に、樽の火を囲む。Docが本を朗読し、死者たちと生者である主人公はそれに耳を傾ける。死者たちの語りが始まり、それを聞いた主人公が次の聞き手へと語り継ぐ。文化の継承は、元を辿れば誰かの「語り」に行き着くだろう。1冊だけ残った本と、その経緯の語り、記憶と歴史の始点である。マーフィーによる異界行物語“The Dead”における戦いは、無力な者たちの完全な敗北であると同時に、そこに生まれる力強い希望を示唆している。それは終わりではなく、始まりである。

4. 死者たちが語る「死者たち」

浮浪者たちが救った「半分燃えてしまった」(212) 1冊の本は、読める部分が100ページあまりという状態であるが、その部分にジョイスの「死者たち」がある。今や死者となった彼らは、「先祖たちが洞窟でそうしていたように」(213) 樽の火の周りに集まり、Docの朗読する「死者たち」を聴き、語り合う。彼らはこの作品とどのように向き合い、何を語るのか。

まず注目すべきは、生者である主人公も、死者である浮浪者たちも皆、そもそもジョイスという作家も、そして「死者たち」という作品も知らないということである。従って、彼らは一切の先入観を持たずにこの作品と向き合うことになる。ジリアン・ムーアは、『ダブリナーズ 100』は「ジョイスの遺産 (legacy) から神聖さを剥ぎ取ろうというトマス・モリスの悪だくみであるというマーフィーの言を引き、『死者たち』の意味や遺産を見直すこと」が“The Dead”の「核となるテーマ」であると述べる(125)。文学史において、キャノンとして揺るぎない地位を確立している「神聖な」この作品を、マーフィーは「脱神聖化」しようとしているのだと言えよう。図書館の焼き討ちを文学史の解体のメタファーと見ることもできそうである。

ジョイスの「死者たち」はDocによって、「偉大な作家ジョイスの名作」としてではなく、「昔の公現祭のパーティーの話」(a tale that told of a party on the feast of the epiphany

many years ago) ⁶⁾ (213) として語り直され、さらにそれを聞く主人公によってその語りがまとめられ、再現される。ジョイスの「死者たち」の終わり近く、パーティー後の部分を Doc が朗読するとき、その内容は主人公によって以下のように要約される。

It told of a lass named Gretta Conroy stood in shadow with her ear cocked to a sad ole song, 'The Lass of Aughrim,' while her husband Gabriel romanced about the snow that gathered like a shawl upon her shoulders, but soon enough his randiness was doused by her remembrance of a traveller lad named Michael Furey . . . (213)

ジョイスの「死者たち」には、ゲイブリエルが「彼女の肩に降り積もる雪についてロマンティックに空想する」という場面はなく、マイケル・フューリーももちろん「トラベラーの若者」ではない。Doc は語り部らしく、細部にちょっとしたアレンジを加えているようである。しかし、それはオリジナルの「死者たち」を大きく変更するものではない。「死者たち」において、ゲイブリエルは確かに「オークリムの乙女」に聴き入るグレタを見て、ロマンティックな考えを抱く。「彼女の姿勢は優雅で神秘的で、まるで何かの象徴のようだ。暗がりの階段に立ち、遠い音楽に耳を傾けている女性は、何の象徴なのだろう？」(182)そして、「彼女が自分のものであることを幸せに思い」(186)、その所有欲はやがて「激しい肉欲の疼き」(187)となる。ただ、その欲情は、グレタがマイケルのことを語る中で行き場を失い、最終的には消える。それまで知らなかったグレタを知ったゲイブリエルは、眠ってしまった彼女を前に涙を流し、西への旅を夢想し、やがて意識が遠のいていく。

この流れを踏まえた上で、マーフィーの“The Dead”に戻ろう。グレタがマイケルのことを思い出したために、ゲイブリエルの「欲情が、冷水を浴びせられるようにして消されて」しまったこと、そして、それに続く彼の内面のドラマの語りを聞いた死者たちは、ゲイブリエルに共感し、「この本の作者はその心痛をよく捉えている」との意見で一致する。しかし、ただ一人、Crazy Mary がこれに激しく異を唱え、ゲイブリエルを「死体に寝取られた、とんでもない馬鹿者」(213) とこき下ろし、彼の涙を嘲り、熱弁を振るう。

On she raved about how *virgin worship* is first cousin to *whore hatred*, and if you scratch the skin of any sentimentalist you'll find a chauvinist, cos it's the icon of a woman they're mooning over, not the real thing, for a woman pisses, shits and bleeds just like a man. Worse ner them singers on the satellite wireless, said Crazy Mary, with their everfecken veneration of the *she*, some dickless git always bleating about some bird he was trying to get into the knickers of – and most likely once he got her knocked up he'd be using her for a punch-bag. (214) (イタリックは原文、下線は筆者による)

他の死者たちがゲイブリエルの視点で物語を眺める一方で、Crazy Mary は彼の視点から離れることで見えてくるものを語る。Crazy Mary は、ゲイブリエルはグレタを勝手に偶像化し、その偶像が失われたことに感傷的になって涙を流したのだと考え、そのことを痛烈に批判する。「処女崇拜と娼婦憎悪は似たもの」という指摘はそのとおりであろう。あ

る女性を聖女と類別することは、必然的にそれ以外の女性をその対極に位置づけることとなり、それは女性を生身の人間として見る姿勢からは遠い。「センチメンタリストの皮を引っ掻けば、そこには chauvinist がいる」と Crazy Mary は言う。“chauvinism⁷⁾”とは「極端な一辺倒」のことであり、特に“male chauvinism”は男尊女卑思想を指す。「死者たち」の最終部分、ゲイブリエルが涙を流し、死者たちに思いを馳せ、西への旅を夢想するに至る部分は、いわゆる彼のエピファニーの場面として知られ、その叙情性と頭韻を駆使した文章の美しさで有名であるが、Crazy Mary はその美しさの下にあるゲイブリエルの差別意識や身勝手さを暴き、他の死者たちとは異なる読みを提示するのである。

このように、Crazy Mary は「死者たち」を女性の視点から捉え直してみせるのだが、ここでもう一つ注目したいのは、先の引用の後半部分である。下線部が示すように、後半部分では Crazy Mary の口にした言葉がそのまま提示されている。彼女はゲイブリエル批判の流れで、「若い娘の下着の中に潜り込もうと」する「役立たずのクズ」を引き合いに出し、そのような男は「一旦関係を持つと、相手をサンドバッグ扱いする（はけ口として使う）」のだと言う（そして、ゲイブリエルはそのような男以下であると言い切る）。ここには間違いなく、「死者たち」において管理人の娘リリーがゲイブリエルに言う言葉——「最近の男たちは口先だけで、人から何をむしり取れるかばかりで」——の反響がある⁸⁾。実際、Doc は Crazy Mary の発言を聞いてすぐにリリーの台詞を引用する。言い換えれば、Crazy Mary の語りには、リリーが招き入れられているのである。

この意義は大きい。ジョイスの「死者たち」において、リリーはモーカン家のパーティーの場にいながら、その場から排除されている。作中で、彼女は名前が与えられた生きた登場人物の中でおそらく唯一の労働者階級に属する人物であり、訪問客を迎え入れ、料理を運び、皿を片付け、忙しく立ち働いている。しかし、彼女がパーティーの場で会話に加わることはない。上に挙げたゲイブリエルに対する「最近の男たちは……」という発言が、物語内でただ一度きりの彼女の意見の表明であり、その言葉の激しさはゲイブリエルをたじろがせる。“The Dead”の作者マーフィーは、ジョイスの「死者たち」の裕福で教養のある人々の集まりから排除されるリリーの言葉を拾い上げ、それを Crazy Mary の主張の核として、Crazy Mary の声で再生する。つまり、Crazy Mary の主張は、女性の視点からのものであると同時に、ゲイブリエルやミス・アイヴァーズのようなインテリではない人物の視点からのものなのだ。

この Crazy Mary の主張に、浮浪者たちの中で唯一のインテリである元教師の Doc は反論するが、その主張は非常に権威的なものである。Doc は Crazy Mary を「腐肉を食べる鳥」にたとえ、その読み方を「作家の言葉という骨から肉をしゃぶり取る」ようだと批判する (214)。「すばらしい物語は血と骨で感じる」ものであり、「その輝きは時が経っても決して色褪せることはない」と言う彼は、Crazy Mary に「好きなように分析も批判もすればいい、でも、物語は頭 (mind) ではなく心 (heart) で読むべきだ」と、物語の「正しい」読み方を指南する (214)。この Doc の主張は、キャンノンを神聖視する見方に極めて近いものであると同時に、ゲイブリエルがスピーチで展開したミス・アイヴァーズ批判——「新しい理念や主義に駆られ、古き良き美徳を失っている」——とも繋がっているだろう。Doc の主張に、読者はゲイブリエルの声を聞き取ることができる。

Crazy Mary にリリーが、Doc にゲイブリエルが重ねられるのであれば、Crazy Mary

と Doc の議論は、「死者たち」におけるリリーとゲイブリエルの衝突の再現という側面を持つことになろう。ゲイブリエルはリリーを「彼女が子どもの頃から知って」(Joyce 153) おり、彼女に対して一貫して庇護者的な姿勢を取っていた。リリーの男性批判に虚を突かれると、彼は彼女の手硬貨を握らせ、彼女に礼を言わせることでその批判を無効化しようとせずにはいられない。しかし、“The Dead” での Crazy Mary と Doc の対峙では、そのような構図はもはや見られない。Doc の反論は、Crazy Mary の「死者たち」に対する批判を、その行為自体価値のないものとして封じかねないものであるが、Crazy Mary がそれに怯むことはない。彼女は Doc の「正統な読み方」の主張に耳を貸さず、下品な言葉で捨て台詞を吐く。そして、そこからさらに死者たちの「対話」(discourse) が続く。重要なのは、この「対話が続く」という点であり、それはつまり、Doc も Crazy Mary もその他の者も、「死者たち」をめぐるこの対話においては対等なのである。このとき、「死者たち」は確かに「脱神聖化」され、教養の有無や性別に関わらず、すべての人に開かれたテキストとなる。

皆が眠ってしまった後、Crazy Mary は「死者たち」の本を火に投げ込み、燃やしてしまう。図書館の他のすべての本と同じように、ジョイスの「死者たち」は灰になる。しかし、この Crazy Mary の行為は、民兵らの図書館の焼き討ちとは全く異なる意味を持つ。これについては、作者マーフィー自身による説明がある。ムーアがその説明を引いている部分を引用する。

Murphy is . . . quick to point out that the text is only obliterated once the community around the fire has connected with the story: “The important thing is, they burn it after reading it. They’ve understood the story, they’ve analyzed it, argued about it, and then moved on.” (Moore 125)

本を燃やすのは皆で物語を共有した後のことであり、それは物語との決別ではなく、むしろ物語との結びつきを示唆する行為であるとマーフィーは述べる。ここで思い出したいのは、物語が語られているときの主人公と浮浪者たちの様子である。主人公である語り手は空腹のあまり、モーカン家の食卓に並ぶ豪華な料理や食材の描写にうめき声を上げるが、浮浪者たちは彼の食欲を理解できない (213)。死者には空腹がわからないのだ。その代わりに、死者たちは語りを聴き、考え、口を開き、自分たちの声で議論をする。ゲイブリエルを罵倒する Crazy Mary の唇の上には唾液の滴が見える。これは彼らの「パーティー」であり、死者たちは物語を「食べて」いるのだ。彼らはこのとき、初めて聴く物語を体の中に取り込み、それを自分たちの血肉にしている。それは逆説的に、「生きる」ために物語が必要不可欠な「栄養」であることの示唆であるだろう。

一つの物語を共有することで、そこにまた新たな語りが生まれる。社会の隅に追いやられた “The Dead” の主人公は、同じく社会の隅にいる、戦いに破れて命を失った死者たちに迎え入れられ、彼らの語りを引き継ぐ者となる。この主人公兼語り手の「生きた話し言葉」によって、「『死者たち』について語る死者たちは何度でも蘇り、その声が聞き手／読者に届く。マーフィーの “The Dead” は、ジョイスの「死者たち」を珠玉の一篇として崇めるのではなく、それが一つの物語として受け止められ、人々の間に次の語りを生み

出すその様を描く。そして、物語が一つでもそこにある限り、死者たちは語り続け、そうして記憶と歴史が引き継がれていくことを示すのである。

注

- ¹ これ以降、ジョイスの「死者たち」と区別するために、マーフィーの「死者たち」を言う際には原題“The Dead”を用いる。
- ² この引用部分は Moore の論文内の引用から引いたものである。Moore はこの部分の出典をダブリン・ブック・フェスティバルの公式ウェブサイトであると明記しているが、現在該当ページは削除されており、参照できない。
- ³ トラベラーのグループの全国組織である *Irish Traveller Movement* のウェブサイト内、“Irish Travellers” 参照。
- ⁴ ゲイブリエルの独白は、ミス・アイヴァーズが彼をアイルランド西部への旅に誘ったことを想起させるが、ゲイブリエルの考える「西」はミス・アイヴァーズらナショナリストが理想化するアイルランド西部ではなく、死者の住む領域であると筆者は考えている。この「西」の意味するところについては様々に論じられている。例えば河原論文 368-371 頁を参照のこと。
- ⁵ 1916 年 4 月 24 日にダブリンで始まった英国に対する武装蜂起。蜂起軍はダブリンの中央郵便局を占拠し、「アイルランド共和国宣言」を読み上げたが、29 日に降伏した。その後間もなく、現地のイギリス陸軍によってわずか 10 日の間に 15 人の蜂起指導者が次々に処刑され、「多くのアイルランド人の潜在的な反英感情に火がついてしま」(山本 113) ったことが独立への契機となった。
- ⁶ “epiphany” は 1 月 6 日の東方の三博士来訪の祝日(御公現の祝日)のことであり、ジョイスの「死者たち」のパーティーもこの日かこの前夜に開かれていると考えられる(米本 456)。ジョイスの作品における“epiphany”と言えは個人に訪れる啓示の瞬間を指すのが一般的であるが、マーフィーはここで敢えてこの語を御公現の祝日の意味で用いることで、ジョイスの「死者たち」に付随する権威性を減じようとしているように思われる。
- ⁷ “chauvinism”には「盲目的愛国主義」の意味もある。この語によって、女性を偶像化して崇めるゲイブリエルと、アイルランドという国を理想化するミス・アイヴァーズの近似もまた示唆される。
- ⁸ ケリー・アンスパーは、ケイト叔母の「リリーはもう以前の彼女ではない」(“The Dead” 156) という発言に、リリーの妊娠が仄めかされているとする。(Anspaugh)

引用文献

- Anspaugh, Kelly. “‘Three mortal hour(i)s’: female Gothic in Joyce’s ‘The Dead.’” *Studies in Short Fiction*, vol. 31, no. 1, winter 1994, pp. 1+. *Gale Academic OneFile*, link.gale.com/apps/doc/A15356026/AONE?u=jpndsu&sid=googleScholar&xid=88fb0783. Accessed 18 Sept. 2022.
- Dhuibhne, Éilís N. “*Dubliners 100. 15 New Stories Inspired by the Original Dubliners.*” *Estudios Irlandeses* 10, 2015. pp. 144-153.
- Fogarty, Anne. “‘I think he died for me’: Memory and Ethics in ‘The Dead.’” *Memory Ireland: Volume 4: James Joyce and Cultural Memory*. Syracuse UP, 2014. pp. 46-61.
- “Irish Travellers.” *Irish Traveller Movement*, 14 Feb. 2022, <https://itmtrav.ie/what-is-itm/irish-travellers/>. Accessed 18 Sept. 2022.
- Joyce, James. “The Dead.” *Dubliners: Centennial Edition* (Penguin Classics Deluxe Edition). Penguin Publishing Group, 2014. pp. 151-194.
- Moore, Gillian. “[Un] covering Joyce: *Dubliners 100* and the Contemporary Irish Short Story as Intertextual Practice.” *Canadian Journal of Irish Studies* 42, 2019. pp. 114-137.
- Morris, Thomas. “Strange Traffic: An Introduction of Sorts.” *Dubliners 100: Fifteen New Stories Inspired by the Original*. Tramp Press, 2014. pp. vii-xii.
- Murphy, Peter. “The Dead.” *Dubliners 100: Fifteen New Stories Inspired by the Original*. Tramp Press, 2014. pp. 207-215.
- Yeats, William Butler. “*Cathleen Ni Houlihan*” *The Collected Works of W.B. Yeats Vol II: The Plays*. Scribner, 2010. pp. 83-93.
- 河原真也 「「死者たち」にみるカトリック中流階級の諸相：ウェスト・ブリトン／大学問題／アイルランド西部」金井嘉彦・吉川信編著『ジョイスの罫：「ダブリナーズ」に嵌る方法』言叢社、2016年。351-372頁。
- 日本図書館情報学会編『図書館情報学用語辞典』第5版、丸善出版、2020年。
- 松岡利次『アイルランドの文学精神：7世紀から20世紀まで』岩波書店、2007年。
- 山本正『図説アイルランドの歴史』河出書房新社、2017年。
- 結城英雄「アイルランド文学ルネサンスとジェイムズ・ジョイス(1)」『法政大学文学部紀要』第64巻、法政大学文学部、2012年。23-36頁。
- 米本義孝「訳注と解説」ジェイムズ・ジョイス著『ダブリンの人びと』米本義孝訳 ちくま文庫 筑摩書房、2008年。385-468頁。